転身

ふいとトンネルを抜け出て目をしばたたくと
私は思いきり大きく伸びをした
ああ、なんと長い間
自分自身とのみ会話をしてきたことだろうか
それにしてもこのトンネルこそ
自分で作り上げてきたものだったとは
しかも、御苦労にも
己の行く手に自分自身の手で伸ばし続けてきたのだ
つまりは自ら閉ざし
抜け出ることを怖れたのと同じことだったのだ

ああ、この緑のまばゆさ
ああ、この天空の輝く青さ
滴るような香気に満ちた花々
何よりも際限のないこの空間の広さと大気だ
そして一歩進む毎に変化する光の反射
何ものをもってしても封じ込めることはできない
果てしなく乱雑で整然とした無作為
そして常なる瑞々しいエントロピー
飽食を知らぬ世界！

耳元でざわめく者は何か
この私の神経をなぶる者は何か
私は決して怒りを鎮めることはしないだろう
良心とはそもそも何だろうか
全ゆる暴走を己の内に封じることか？
ならば暴走とはそも何であるか
おお、何といびつな自由の姿よ
空腹のうちに倒れるがいい！

(1990.2.18)